

ペシャワール会報

No.39



ペシャワール会
〒810 福岡市中央区大名
上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三七二
一丁目一〇一三五

ゆれるアフガンゆるがぬ JAMS	中村 哲
マラリア基金設立	村上 優
マラリア禍を脱す	中村 哲
「気軽に真面目に」初めての募金活動	深澤留美
多くの人の協力に驚きと感謝	古賀寛史
ペシャワール版「風が吹けば…桶屋が」の話	倉松由子
念願のダラエ・ヌールを訪問	林 達男
奇妙な疎外感を感じてしまいました	豊崎朝美
ペシャワールへの思いが日ましに深くなる	藤田千代子
トーキョーを撃て!	服部亮市
『ダラエ・ヌールへの道』を読んで	山内昌之

ファティマの日向ぼっこ*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。現地の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ゆれるアフガン ゆるがぬJAMS

JAMS (日本アフガン・医療サービス) 顧問医師 中村 哲

■全国境を閉鎖

今年一月に入ってから、昨年に続いてアフガニスタンの首都カブールは激しい市街戦にまきこまれました。日本でも散発的に報道され、私たちの活動を心配されている方々も多いと思いますので、その後のなりゆきを多少お伝えしておきます。

一月一日、かつて互いに反目状態にあった、南部のヘズビ・イスラム党と北部のドスタム派が連合、現政府を支えるジャミアテ・イスラム党およびマスード派への本格的な攻撃をカブールで開始しました。

すでに昨年一月以来、旧反政府諸党派の対立で、カブールは首都として機能できない状態が続いていました。しかし、今回の衝突はかつてなく激しいもので、戦闘機までくりだされ、多くの犠牲者を出しました。戦火はカブールを事実上壊滅させたばかりではなく、アフガニスタン北部のマザール・シャリフにも飛び火、一月中旬までに同地に留まっていた国際赤十字委員会もタジキスタンに退避しました。

一月上旬、戦闘は東部のソルビでも激しくなり、ベシヤワールに近いジャラバードに、カブール

からの都市避難民約六・七万人が押し寄せました。しかし、パキスタン連邦政府は、避難民のベシヤワール流入による混乱を警戒、カイバル峠をはじめ全国境を閉鎖、救援に向かおうとするUNHCR (国連難民高等弁務官事務所) やユニセフ、外国NGOの通行許可が停止されました。

パキスタンは現在、北部のカシミールでもインドと緊張状態にあつて、同地の内乱で頭を痛めています。それで、政治的な混乱を避けようと、やむをえず北西部国境からのアフガン人流入を閉め出す政策をとったのでしょう。パキスタン自身が、内外ともに大変厳しい事情にあるのです。

■間道越して補給

JAMSは、保健医療分野で、唯一実質的に動く立場にありましたので、パキスタン側の難民コミッションの要請に従い、避難民救援の臨時診療をジャラバード近辺のキャンプで行うことを計画、一月末までに大量の医薬品と機材をそろえて待機しました。

一月下旬、パキスタン政府が各党派の和解工作にのりだしましたが、なかなか実現せず、戦闘は収まりませんでした。ラバニ・現アフガニスタン

大統領は、すでに家族を欧米諸国に避難させたと伝えられています。

国境閉鎖の措置は今までになく厳しいもので、一時はアフガニスタン国内診療所のスタッフたちが交代でベシヤワールに帰れず、十日間足止めを喰らいました。私たちの方は、ダラエ・ヌール、ダラエ・ピーチの各診療所への補給にやっつとで、山越えを覚悟で間道を利用し、大変な苦勞の末、診療所については、やっと十分な医薬品を確保できました。

二月十二日になってラマザン(断食月)に入り、紛争当事者どうしの一時停戦協定が実現、国境付近は、しばしの平和にほっとしています。国連機関による救援物資の輸送が本格化し、テント・食



JAMSスタッフ (ヌーリスタンのワマ部落)

ワマ診療所オープン

3番目の国内診療所

3月12日より5日間、シャワリ医師以下JAMS首脳陣が準備のため現地滞在。住民との最終会談を行い、開設を決定。輸送手段その他、具体的な対策を開始。

ダラエ・ビーチ診療所から、ジープで1時間半行き、歩行約5時間。最大の問題は輸送。食料は現地調達が困難。さらに、4月中旬から増水期に入り、3カ月間輸送は大幅に制限される。

このため、薬品月間使用量200-300kg、食料・日用品700-800kg、総計約1トンの荷揚げを毎月要するが、4月の増水期前までに3カ月間分・3トンの搬送を始めた。

ワマ地区は人口1,500家族、1日往復行程の住民を入れると約5,000-7,000家族（最低5-6万人）が恩恵を受けることになる。奇跡に近い壮挙であると共に、転回点である。これをもってJAMSの「山岳無医地区診療」は本物となる。「ヌーリスタン」の成否は、JAMSの試金石。これを避ければ「アフガニスタンの人々の困難」をあげつらう資格なし。

輸送は現地住民の若干名を雇用、滞人員は医師1、検査2、助手4、門衛2、料理人1の編成。JAMSは、外科的処置が弱点であったが、4月1日より外科医1名を雇用。全スタッフに骨折・外傷の処置訓練を開始。

料の補給が行われています。許可が下り次第、私たちが直ちに避難民援助活動を開始します。

■農村は平和

しかし、戦火はカブールとその近辺、マザリ・シャリフに限局しており、大半の地方は平和そのものです。確かに、主要幹線道路の治安の悪化でペースは落ちていますが、農村部の復興は確実に進んでいます。日本で不思議に思われる方が多いでしょうが、現在の状態は、戦国諸大名が京都の争奪にあぐらをかいた時代を思えば、ある程度理解できるでしょう。ほとんどの地元農民たちは過去の内戦でこりこりしており、「自分の村復興」に忙殺されているのが現状と言えるでしょう。人々はカブールの権力闘争をよそに、生き生きと元の生活に戻りつつあります。

この中で、戦火による多少の影響はありますが、



ワマの住人を診察する中村医師

JAMSの活動に大きな変更はありません。アフガニスタンの各診療所も、何事もなく営まれています。これまでも似たことは何度もありました。今こそ、「復興支援」が必要なのです。今年予定しているヌーリスタンのワマ診療所の準備も、遅滞なく行われています。どうぞ変わらぬ御支援をいただければ幸いです。

表紙絵をめぐる小さな物語 2

甲斐大策

ファティマの日向ぼこ

ファティマと子供達が、パキスタンからアフガニスタンへ戻ったのは三年前の夏、父母の村へ他家の嫁としての帰郷だった。

谷を出たトラックが野性のラヴェンダーの香りで一杯の盆地へ入った時、カーブル生れキャンプ育ちのファティマだが、呼吸のたびに懐かしさを感じたものである。

難民キャンプで生れた四人の子のうち二人は、山羊の胆汁みたいに皮膚が黄変して死んだ。ここで生れた子は既に歩き始めた。

村を離れずにいた舅姑は爆撃をうけ、舅は背中を火傷、姑は両眼と片足を失っていた。舅姑の妹達、夫の兄達の嫁、この家には戦いが生んだ四人の寡婦がいる。今年二十四歳のファティマだが、五十三歳から〇歳まで十人の女達に率先して家事と果樹園の全てをとりしきっている。

時折現れる父がいう。

「笑い声、母さんみたいにでなくなつたな。」

微笑しながらファティマは堂々の日向ぼこである。ただ、再びカーブル攻略へ出ている夫と義弟達のことを気に懸かっている。

繰り返すマラリア流行に
恒常的な治療体制を

●マラリア基金設立

ペシヤワール会事務局長
村上優

二〇三件・二〇三万円

(一九九四年二月末現在)

持続的なご支援を！

昨年十一月の「マラリア撲滅キャンペーン」には全国より多数の支援が集まりました。二月末日までに二〇三二件、二〇三万円の寄付が寄せら



山岳地帯を行くJAMSの車輛

れました。これは短期間に、これほど多くの寄付が寄せられたのは初めてのことです。「ひとりの命が二〇〇円の薬で救われる」という中村先生の声が、人々の心に届いたのでしょう。善意の人々の多さに事務局員は感激しております。

さて今回の悪性マラリア大流行は難民の帰還に伴い、これまでその地域に無かった感染症が持ち込まれた例です。抵抗力が乏しいところにマラリアの中でも致死率の高い熱帯マラリアが流行し、一時期はJAMSが診療圈にしているダラエヌール、ダラエビーチやその周辺の村々で数千人が死亡することが予想されました。JAMSは移動診療チームを派遣して治療活動を展開し、不足していたキニーネなど抗マラリア剤も今回集まった募金の中で薬品を調達し、最悪の事態は回避されました。

今回は三五〇万円が投入されましたが、この地域でマラリアを平定化するには五年の歳月を要し繰り返し流行するマラリアの流行を叩いていくうちに免疫が生じて安定するのを待つことが求められております。この夏以降も繰り返し流行するマラリアに対しては診療体制を強化して治療にあたりますが、今回寄せられた募金はそのための財源

として確保し「マラリア基金」をスタートさせた。

「マラリア基金」はマラリアの治療に加えて、突発的に発生する流行性と致死性の高い感染症への対応を念頭に入れて設置しました。現地では腸チフスやコレラ、赤痢、デング熱などが流行する兆しにあり、再び緊急の財政援助を要する場合があります。この時のための財源として「マラリア基金」をこれからも強化してゆくことが必要です。

今回の募金は会員の方々以外のたくさんの方が自発的に学校や職場、サークルで呼びかけて募金をいただき、私達が考えつかないスタイルで広がりしました。この協力の輪が持続的に広がりますよう祈らずにはおられません。

ありがとうございます。

各地からの便り

二年生がおこづかいをあつめました。このお金をパキスタンの子どもたちのちゅうしゃだいにしてください。

(熊本県阿蘇 小学二年生)

*時々役に立てることがあればと思います。

(大宮市 K・O 女)

*マリアの記事を読みました。少額ですが薬代に使
つて下さい。
(北九州市 K・T 男)

(北九州市 K・T 男)

*ズームイン朝!!でベシヤワール会を知りました。二〇円で一人の命を助けられるなら…とおこづかいのなかから少しですがお送りします。

＊私の家族も少しですけど加わってくれました。役立てて下さい。
(福岡市 H・D 女) (千葉市 高校三年生)

(福岡市 H・D 女)

*折角復興しかけている方々が一名でも多くマラリアから救われますように、心ばかりですが役立てて下さいますように。

(福岡市 Y・S 女)

*94 新年募金です。正月早々、アフガン内戦が北部にも拡大!ということではいつ平和になるのか、こゝなればひらきなおつて待ちます。今年もよろしく願います。

(瀬戸市 K・K 女)

*今年も、子ども達からもらったお年玉の一割をペシヤワール会のために送ることに決めました。何年か続けて献げることで、子どもの中にペシヤワールの働きが身近になっている様です。

(福岡市 T・N 男)

*姉(倉松由子)が日本に居るときよりずっといいききしている感じがします。「使える限り、ピシピシ使つてやって下さい」と中村先生にお伝え下さい。

(横浜市 K・N 女)

*年末の朝日新聞の記事を見て子供達に話した所、お手伝い一回五円也を注射の為にあげたいと申します。少しですが、お役に立てればうれしいです。子供達がとても喜んで人の役に立とうとしてくれたこともうれしいでした。

(福岡市 R・S 女)

*知人にも話をして募金をしていただきました。また集まりましたら送りたいと思っています。

(長崎市 M・O 女)

*テレビで現実を知りました。ユニセフなどの基金には参加していましたが、この様な現実があるとは知りませんでした。草の根の皆様の努力に感謝致します。毎年少しずつでも協力させて頂きます。

(横浜市 M・M 女)

*老婆の一滴ですがよろしく願ひ致します。早く治まりますよう祈ります。

(別府市 A・T 女)

マラリア禍を止す

二万人近い患者が治癒

中村哲

昨年夏から秋に大流行して大量の犠牲者を出した「悪性マラリア」は、全般的に鎮まっています。

昨年十月以来、ダラエヌール溪谷(七万人)、同溪谷対岸のクズ・クナル(五万人)、カマ地区(二万人)、ダラエ・ピーチ診療所周辺(三万人)の各地で、移動診療をフル回転させ、関わった地区については多大の効果を上げました。

今年一月末までの集計で、診療所で治療を受けたものを加えると、二万人近い患者が助かったこととなります。効果を追試させましたが、治癒率は驚くべきで、私たちの訪れた村のほとんどがマラリア禍を脱しました。JAMSは絶大な地元住民の信頼を得ました。もちろん、乾季の冬に入って、蚊が発生しなくなつたのも大きな助けでした。散発的に患者は見られますが、悪性マラリア原虫は「慢性感染」という形で人体の中で越冬し、

水田の出現する春と夏に再び流行を始めるものと思われれます。そこで今年は、犠牲者を少なくするために早めに活動を開始する予定です。

何よりの効果は、皆が安心して農村生活の回復に励める力になったことです。また、日本の心ある人々の厚意がこんな形で直接届けられ、人々と笑顔を分かつことができたのは、本当に心温まる思いでした。命に軽重はありませんが、数千万円、数億円を投ずる臓器移植に血道を上げる医療を眺めて当地に戻ってきた者には、「三〇〇円の命」の尊さが、しみじみと思われたことでした。



マラリアの検診

●学生たちがマラリア募金活動を自発的に行ってくれました

「気軽に真面目」に

初めての募金活動

早稲田大学法学部学生 深澤留美

きっかけは、アフガニスタンで悪性マラリアが大流行しているとのこと、テレビを通じて中村哲先生の緊急支援の呼びかけを偶然見かけました。

私がある時ショックを受けたのは、一人を救う薬代が僅か二百二十円。私達日本人が普段何気なく使える金額であるという事実でした。缶ジュース二本、煙草一箱我慢するなんて大したことではありません。人命は皆尊いとは言いますが、一人当たり二百二十円が無いばかりに何千人と命を落とす国があるかと思えば、何百万という高額医療費が問題となっている国もあるという事実、改めて愕然としました。

自分だけ少しばかりの募金することは出来ません。しかし、もう少し何か出来ないものではないでしょうか。自分さえその気になれば、一人箱を持って、ビラを撒いて大声をはり上げれば、いくらかなりとも集まるかもしれません。二百二十円余計に集めれば一人多く助けることが出来ます。ではなぜ自分だけためらっているのでしょうか。突き詰めていくと理由は簡単でした。単に「面倒臭い」、募金活動なんて「恥ずかしい」のです。割り切った

しまえば何だっけ出来る。そう思い、友人や、大学の先生方に打診している内に、賛同者が得られ、本当に出来そうな気がしてきて、いつの間にか「時は今」と、行動に移していました。

十人程でミーティングを二回開き、どういった趣旨で、具体的には何をするのかを話し合いました。私が今回一番念頭においたのは、「気軽に真面目」ということでした。「ボランティア」という響きに何か重苦しさを感じ、「自分がするようなどではないな」と思う人が学生に限ったわけではありませんがかなり多いのが実情です。又、「かわいそう」とは思うものの、わざわざ十円、二十円という金額のために郵便振替で送金しに行くとか、ペシャワール会に問い合わせをすることはまず面倒なのではないでしょうか。そこで、その手間を私達が肩代わりできたら結構な金額になるのではとの予想が的中しました。

二、三日前から学内に募金キャンペーンの宣伝用の立て看板を四枚設置し、十二月六日～九日、昼休みという皆んなの負担にならず、人の多い時間帯を選び、短期決戦で臨みました。「自分のサークルにもいる」ような女子大生の友人になるべく多く参加してもらい、人をお願いをするのだから、小綺麗な格好をしてもらい、さわやかな印象で活動を展開するように心懸けました。明るく楽しいイメージにするために、BGMにも気をつかい、一瞬なる遊びのサークルかなと思わせるような流行の洋楽を流し、まず、「何だろう」と興味を持っていただけるようにしました。

毎日二十人前後入れ替わり立ち替わりで参加していただき、二、三人ごとにキャンパス内でゲリラ戦を展開しました。道行く学生に「マラリアを治すお薬を買いたいのですが、その手助けを、十円、二十円単位でお願いできませんか」とビラを渡しながらアプローチしました。

全く無視して、いやな顔して通り過ぎていく人も大勢いましたが、「十円でいいの?」とか「缶ジュース一本分位ならいいよ」と言って募金をする人が大変多くいました。十円だって二十二人集まれば一人救えるのです。その事実、驚く人も多かったです。

何もかもが初めての経験なので、どうなるのか全く分かりませんでしたが、毎日小銭ばかりでも一時間で四万から多い日には七万七千円も募ることが出来ました。最終的に自分でサークル等を回って募った分や、募金箱からのものを足して、三十五万二、三三二円という思いがけない結果となりました。

反省点としては、ゲリラ戦で、ラウンジやカフェテリアで座っている人達の所に行ったときに、十分に説明する間もなく、友達につられて訳も分からずいたであろうということです。金額が問題なのではなく、この瞬間に、お金を出すという行動にどれだけの意味が込められているのかを、一人一人に感じてほしかったのです。しかし、全体としては今回の趣旨に沿って成功したと思います。義務感ではなく、自発的に、自分が少し頑張ること、一人でも多くの人が助かると思えば楽しいことでした。自分の生活を切り詰めてやっている

わけではないので決して悲壯感を漂わせたりはしませんでした。日本が豊かになったから、今の自分に出来ることをやっただけです。

ボランティア活動には様々なレベルでの貢献の仕方があります。中村先生のように現地で最前線で働くときに最も重要なのは「継続性」です。そしてその活動を資金面で支えるのは、一人十円で一回きりでも、より多くの人が協力していけば成り立っていきます。私の活動は今回限りのものですが、一見こうしたことをやらなさそうな、自分と変わらない女子大生が行動を起こしたことに由るインパクトは結構あったのではないかと思います。これを機に、ボランティア活動なんて真面目くさくてかっこわるいというイメージが消え、自然なこととして、いつもボランティア活動をしている人だけではなく、いろんな人が気軽に行動を起こせるような風風が早稲田大学で根づけばいいなと願っています。

多くの人の協力に驚きと感謝

長崎大学医学部学生

古賀寛史

私と中村先生との出会いは、私が高校生の時でした。私は福岡出身で、県立の福岡高校に通っていました。そして、その高校の創立記念講演に、福岡高校OBである中村先生がいらっしやったのです。当時、私はバカだったので（今でもバカで

すが）、中村先生の事は、露ほども知らず、折角の先生の講演も、ただボーと聞いていただけでした。

（大変失礼しました）

それから、様々な機会を通じて、中村先生の事を知るようになりました。

その後、私は晴れて高校を卒業して、長崎大学の学生となりました。大学ではサークルに入学しました。その普段の活動としては、毎週、市内の児童福祉施設の子供達と一緒に学習をしています。このように書くと、サークルのメンバーが良い人達ばかりのように思われるかも知れませんが、一部を除いて決してそのようなことはありません。ただ、子供達と接している時は、気を引き締めているつもりです。

他にも、このサークルでは、年末に募金活動を実施するのが行事のようになっていきます。これまでに、ユニセフや砂漠の緑化運動を推進している団体等に向けて、募金活動を行ってきました。そして、昨年の募金活動では私個人の希望も含めて、ペシャワール会に協力させていただきました。

しかし、今回は例年と違って募金活動実施までのプロセスは、正直言ってスムーズなものではありませんでした。

まず、誰が率先して募金活動を行うのか、という事です。これは一悶着の末にようやく私に決定しました。その理由は、普段のサークル活動はサボッても、友人との麻雀大会には欠かさず出席したという実績を買われてのことでした。

さて、私が一応担当にはなったのですが、実際に駆けずり回ってくれたのは、真面目な女子部員

と私の仲間たちであるのは無論の事です。

今回の活動の目的としては二つありました。

①長崎の人々にペシャワール会をよく理解してもらう。

②募金を実施し、ペシャワール会への募金の協力を求める。

この①の方法としては、地元の新聞社、テレビ局とコンタクトをとって、報道してもらいました。その甲斐あってか、募金に協力するだけでなく、現地のワーカーとしてペシャワール会に協力したいという手紙が届きました。

そしていよいよ街頭募金実施の当日です。

募金当日、街頭に立つて声を張り上げてアピールしていると、予想以上に多くの人々が協力してくれることに驚きました。加えてこう言っては失礼ですが、一見ヤクザ風のお兄さんが気前よく募金して下さるのです。それも一人だけではありません。そんな人々の暖かさに私は深く感動し、これまで自分が一円も募金してこなかったことなどすっかり忘れ、

「現代人もまだまだ捨てたものじゃないのだなあ。」

なんて考えたりもしました。

こうして二日間の募金活動は無事終了しました。これで、サークル内の結束もより一層強くなったと思います。これからも機会があれば、ペシャワール会の活動に積極的に協力したいと思っています。中村先生をはじめ、現地のワーカーの方々が、これからも充実した活動を続けられるよう、勝手ながら願っています。

ペシャワール版「風が吹けば…桶屋が」の話

ミッシオン病院理学療法士 倉松由子

*晴天のせいでのどをやられる

今冬は例年になく雨が少なくて、十二月から一月中旬までずっと晴天でした。空気が乾燥して、一日の気温差が二〇度（だいたい二二・二二）という日が続きました。排気ガスやほこりは雨で洗い流されることなく、バザールなど交通の多いところは、黒っぽくもやがかかってみえました。外出すると、のどがガラガラしてうがいやをせずにはいられません。ペシャワールは盆地状のところにあるので、汚染物質は、逃げずにどんどん溜っていくのです。ミッシオン病院のスタッフ全員のどをやられてかぜ症状を呈し、特に最年長のミスター・ピヤラー（らい病棟の事務管理者）と最年少のシャウマン（らい医療専門職員）は、四〇度の発熱後ずっと咳が止まらず、一週間病休をとる程でした。小さな子どものいるスタッフは、大分医者通いをしたようです。

*雨不足で停電

パキスタンは水力発電への依存度が高いので、水が足りないせいか、しょっちゅう停電します。

特に、らい病棟で主な処置が行われる九〜十一時に毎日停電するので、スタッフの意気があがりません。なにしろ、ミッシオン病院の他の眼科や内科の病棟には自家発電装置があるので、ここだけ電気が消えてしまうのです。らい病棟では、冬はだいたい八時半から九時位に全員が顔を合わせて朝のミーティングをし、それから包帯交換等の外科処置をすませてから、各々の仕事にとりかかるというのが日課です。日本の職場だったら、私が考えたように、朝十分早く出勤して、最初に手元をしっかりとらせてやりたい包帯交換にとりかかり、停電前にすませてしまおうとするでしょう。多分異論は出ないと思います。ところがこちらのスタッフのある者は逆の発想で、十一時から包帯交換しようと思案しました。そうすると他の仕事は皆が揃ってやるものではないので、十一時までには人間が四散してしまつて、ちゃんとした外科処置ができなくなってしまうような気がします。またある者は、「石油をかうお金がないのが問題だ。石油代を下さい」といい出しました。包帯交換とのお話のつながりがわからずにキョトンとしたら、病棟においてある小型の発電機を動かしてささや

かな明かりを提供しようという考えでした。

つまり、日本で風が吹いてほこりが舞えば、目を被ったり、洗眼をまめにしたりして、目の疾病はあまり発生しないでしょう。しかしこちらでは、風が吹けばほこりが舞い、目を悪くする人が多発して、三味線の需要がふえ、ねこの数が少なくなつて、ねずみが……、おけ屋が……、と、こつちが思つてもみない結論が出てきます。話の結びがどこになるかは、人によつて違うようですが。

*停電にも慣れて

スタッフの中で実質的な仕事をする助手のサダカットは、私と同意見でした。でも労働強化はこちらでは少数意見なのです。結局、二人が他のスタッフを促してできるだけ早めに包帯交換にとりかかるようにしているうちに、停電といつてもどうせ昼間なので、全く仕事ができないわけではなく、そのうち目が慣れてきました。カルテの記録は、明るい窓際に移動してすればよいのです。だんだん停電が気にならなくなって、仕事のペースも元に戻りました。

実をいうと、私も十一時からの意見に心を魅かれたくちです。そして、時たま寝坊して、サダカットをなげかせました。

一月下旬頃から皆が待ち望んだ雨が降り出しました。植物が息を吹き返し、空気がおいしくなつて、もう春の予感がしています。

念願のダラエ・ヌールを訪問

JAMS放射線技師 林 達男

ペシャワール会の皆様、お変わりありませんか。先日の報告書を書いて、早二か月半が過ぎました。毎日の針治療は平均十五名ぐらいで多忙を極めていきます。

言葉は充分に通じなくても、どうにか意思は通じるものです。片言のウルドゥ語で話しかけると、「その人はパシウトウだから理解は不可能だ」と



新築中の診療所の前に立つドクターシャワリと林さん(左)

まわりに笑われたり、パシウトウだと思って話しかければ「その人はハザラーだからだめだ」と言われたりしながらも、毎日を楽しみ暮らしています。こちらが「ダルトミクニ(痛みますか)」と聞けば、返ってくるのが「オー(はい)」という言葉。叱られているようで、驚くこともあります。

□チャンスが与えられて

先日の報告の中でチャンスがあればダラエ・ヌール、ダラエピーチにも行ってみたいと書きましたが、そのチャンスが与えられました。ドクターシャワリの努力で十二月二十七日より四日間、現地に行くことができました。

私は簡単に行けるものと思って、服装も診療時の白ズボンにジャンパーの軽装で車に乗ろうとすると、ドクターシャワリが「ノーノー」とあわててシャルワルカミーズ(現地で着用されている衣服)を調達してくれました。着替えたら車三台で出発です。ペシャワールの市街を出るときにドクターは「林さん、眼鏡はカイバル峠の検問所を通過するまではずしてください」と言われました。そして私はドクターの車ではなく別の車の後部座

席の真ん中に体の大きなスタッフに挟まれて、隠れるようにして座っていました。このような次第で、有名なカイバル峠の景観を眺める余裕などあるはずありません。ましてや写真撮影などもつてのほかです。ゲートを通過して二十メートルもいかぬところでドクターシャワリが走ってきて「ようこそアフガニスタンへいらっしゃいました」と歓迎の言葉。スタッフ一同も大声を挙げて歓迎してくれました。私もほっとした気持ちと感激で胸が一杯になりました。ここでドクターシャワリの車に乗換ええました。

□難行苦行のドライブ

アフガニスタンは本当に平和であれば豊かな国だろうと思いました。通過する道路の両側には多数の墓が点々と続きます。十数年の戦いでなくなった人達の墓でしょう。また、戦車の残骸が赤錆をつけて残っています。十五時三十分頃ダラエ・ヌールへの入り口に着きました。ここまでは普通の道路でしたが、爆撃のため補修はされていても車はジグザグ運転でした。やれやれと思ったその後は、その田舎道たるや、河原に車の跡が付いているのみの道で、漬物石をばらまいたようなところが何キロと続くのです。カイバル峠の検問所を過ぎてドクターシャワリの車に移って眺めも良くなり、ドクターの説明を聞きながらの楽しいドライブでしたが、石を避けながらのジグザグ運転で上下動の激しいものでした。運転するほうも大変でしょうが、慣れない私は左手で取っ手につかまり、右手で座席の背もたれにつかまっていた難行苦

行でした。

□クリニックは建築中

やっとの思いでクリニックに到着です。現在建設中のクリニックは周囲は全部大きな漬物石を二つに割ったものを積み重ねた見事な建物です。現在、窓枠が入り、床には石を敷き詰め、その上にセメントで上塗りが行われている最中でした。あの山の中で建物こそ小さいが、それでも周囲の土造りの家に比べて、見事なクリニックです。思わず「石の館」とつぶやきました。近いうちにここで診療が始まると、現地の人も喜ぶでしょう。ペシヤワール会の会員の皆様のご支援による建物であり、JAMSのスタッフの協力でできたことに感謝で一杯です。

二百メートルくらい上で現在活動を行っている診療所に到着すると、今日まで活躍していたスタッフ全員で出迎えてくれました。このクリニックは去年、中村先生が先発隊と共に民家を借り上げて造作をしたところです。

□もてなしに感激

着いたのは十六時三十分で夕焼けが美しく、外を眺めている間に夕闇が近づいてきました。庭の中央に細い溝があり、美しい水が流れている生活環境ですが、凹凸があり、年寄りの私には夜の歩行が困難に思われましたがスタッフの皆がよく助けてくれました。

「お茶を飲め、牛乳を飲め」「砂糖は入れるのか」など、至れり尽くせりのもてなしをうけまし

た。ドクターシヤワリさえも「林さん、疲れてないか」「牛乳はもう一杯飲んだらどうか」と大変な世話焼きです。

夕食は二十時頃で石油ランプの下での食事です。二十時三十分頃には「林さん疲れたらうから、早く寝たほうがいい」とのことです。席を立ちました。外に出ると十五夜の月が山端にかかり見事な夜です。

菌磨きをしようと水辺にいくとスタッフが水は冷たいからと湯を汲んで準備をしてくれるし、寝所にいけばベッドの用意はしてあるし枕元にはライトがおりてあり、至れり尽くせりの心くばりに感謝で一杯です。

アフガニスタンは寒いので下着を多く着てくるようにとのことで、二重に着込んでいたところ、思ったより寒くなく、ストーブをたいてくれるので暑くて寝付かれずに、とうとう夜中に掛け蒲団を除けてシユラフのみで朝までぐっすり眠りました。

翌朝七時には外にすでに患者さんたちが三十名くらい来て順番を待っていました。この時間にこまでくるのだからおそらく夜中に家を出たものと思われる。七時にチヨキダール(門番)が整理券を渡すとそれぞれに散って行きます。

スタッフの皆は朝食を済ませ、それぞれの任務に着く準備です。八時三十分には新旧のスタッフの申し送りがあり、新スタッフが外来の受入れ体制に着きます。この時点でドラエビイチにいくチームは出発です。したがって私も彼等と共に車に乗り込み出発です。

またあの道を下るので運転する人は大変です。下りはわりと早く本通りに出ることができました。本通りと言っても道幅は二車線ですが、爆撃のため七、八十メートル間隔で穴があいて、もちろん補修はされているのですが、車は右に左に蛇行運転をしなければなりません。同時にドクターシヤワリは沿道の説明です。「この谷は二千世帯くらいあったのに爆撃で全滅だ」「ここも全部爆撃でやられた」などなど。その道ぞいに点々とお墓が続きます。このような風景を見ると戦争を起した者たちに憤りを感じます。また、罹災者に対しては胸の熱くなる思いで一杯です。戦争を始めた相手を憎くすら思います。戦争は行うべきではないのです。一日も早く地球上より無くし、平和を守るべきです。共に平和のために祈りましょう。

□点々と続くお墓

二時間ほど走ると、後続の車がきません。心配しながら待ちました。案じていた通り、前輪の左のスプリングが折れて応急処置で走ってきたのです。とりあえず次の町で修理です。一号車は先に出発し、ドラエビイチの入り口の細い道を入りしばらく上ります。この道も車一台がやっと通る細い道でそのうえ上り下りの急な坂道です。三十分ほど上ると展望の開けた美しい河原に出ました。ここで遅い昼食です。さながらピクニックのようです。まずスタッフの皆は手、足、顔を洗ってお祈りです。昼食のおいしかったこと、楽しいひとときです。暫くすると二号車が到着です。例によって二号車のスタッフもお祈りをし、食事がすめ

ばすぐに出発です。

これからの道路もまたものすごいものでした。日本では想像もできないような道路です。左は石を積み重ねた崖で、三十メートル下は溪流です。ハンドルを切りまちがえれば谷底です。この辺までくれば周囲に木々が目立ちます。広い川幅のと

ころで材木が流され、筏が組まれています。日本の本曾川を思い出しました。もうだいたい上流に上ってきてますが、よくもこんなところを中村先生は見つけたものだと思心もし、これから先がどんなところかと心配もあります。(続)

奇妙な疎外感を感じてしまいました

JAMS事務担当 豊崎朝美

同じ国にいて祝日が違う

バザールに運び込まれる、新鮮なカリフラワーや葉っぱの緑がみずみずしい大根が、タンガ(馬車)とか軽トラックに山盛りに積まれて、道路を行き交う冬のペシャワールの風景を物珍しく眺めていると、いつものことながら道を行き交う様々な人に目が引かれます。

透き通ったような白い肌、青い目、ギリシャ彫刻を思わせる彫りの深い顔、何となく親しみを感じて容姿を持つモンゴロイド系、大きな鋭い目、ダークブラウンの肌の色を持ったインド系等、種々雑多な人々が、様々な階級、あるいは日本では想像できないくらいに激しい貧富の差のなかで、混沌と生活しています。

そんな社会の中で、さらに一人一人が、強い自己主張を持ち、時にはお互いに牽制し合い、まる

で一匹狼の集団みたいです。こういった中で生活をするのは、均一であることが美德とされ、集団の中に埋没する術を自然に身につけるよう育てられて来た日本人の私にとっては驚きの連続で、戸惑うことばかりです。私の中では不変なものとしてあったものが簡単に覆されることもしばしばで、例えば祝日。国民の祝日は一つの国の中では統一されているとばかり思い込んでいた私にとって、キリスト教徒とイスラム教徒では当然違うし、また同じパキスタンという国に住んでもパキスタン人とアフガン人の間でも違うということを知り、私の持っていた固定観念がまた一つ音をたてて崩れ落ちるのを感じました。

一九九四年一月一日、ここペシャワールでは、日本にいる時のような年末の慌ただしさもなく、新年の華やかさもない、平日と何も変わらない日でした。クリスマスを一年中で一番の祝日として



ミッション病院のクリスマス

過ごしたミッション病院のクリスチャンのスタッフと「ハッピーニューイヤー」と挨拶を交わすとき、今日はお正月だったんだ」と気づくくらいでした。

JAMSにおいては、「一月一日は休日なのか？」と聞けば、「どうして休日なのか？」と問い返されてしまいました。イスラム教のスタッフにとって、太陽暦の一月一日は特別な日ではないのです。

アフガンの一月一日

そんな新年の英字新聞の紙面では、明治神宮に参拝している、あでやかな振袖姿の若い日本人女性の写真が大きくのっていたり、あるいは、東京デイズニールランドの格闘家のミッキーマウスや着物のミニーマウスがパレードしている写真のついでに、平和な国日本のお正月を写し出していました。



JAMSの事務所で働く豊崎さん

しかし、アフガニスタンでは、一月一日よりカブール市内での戦闘が激化し、人々は逃げ惑い、街は空爆によって崩壊し、市民の惨状が連日ニュースで伝えられていました。一月九日に一時、パキスタン政府とイラン政府の要請を受けて、二十四時間の停戦を受け入れたものの、その後戦闘が再開し、パキスタンとの国境近くの街にはカブールからの避難民が溢れ、一年中で一番寒いこの季節にテント、食料、医薬品、その他すべての品物が欠乏した中、パキスタンへの国境は封鎖され、人々はなす術もなく路上にじつとうずくまっているだけだという話でした。

JAMSの院長のシャワリ先生、マネージャーのヤコブをはじめ、JAMSのスタッフの多くは、カブールに親戚、知人が住んでおり、カブールの

戦闘の成り行きを耳にしながら、具体的な詳しい情報がなかなか手に入らず、沈鬱な思いに浸っていました。

外国人であることを強く意識

あるパシュトゥンのスタッフは末の弟がコマンドーとして戦闘に参加している可能性が高く、非常に心配していて、こんなことを話していました。「弟が病気で死ぬのであれば、自分は彼の死に納得する。また殺されたとしても、殺した人間がはつきりしていれば、自分はいずれその人間に復

ペシャワールへの思いが

日ましに深くなる

ミッション病院看護婦 藤田千代子

昨年九月に帰国して、早くも六カ月が過ぎようとしている。病院へ復職して、その後退職。

日本で過ごす時間が長くなればなるほど、自分のペシャワールへの思いが深いことを知るのみであった。

帰国して数か月は、日本にいる日が一日でも長ければそれだけ、現地の人々を裏切っているような気持ちになり、毎日のように今まで接してきた患者さん（特に女性）やスタッフたちが思い出された。

警できるからまだ良い。でも戦闘中に砲弾があたって死んだり、建物の下敷きになって死んだりしたら、彼を殺した相手のはつきりせず、復讐もできず、自分は一生、不幸せだ。」

戦争を経験し、逃げ延び、さらに自分達の国であるアフガニスタンでは、現在も戦闘が続く、戦争を身近に感じているJAMSのスタッフの中心にいて、自分一人だけが、日本の戦後に生まれ、高度成長期と共に平和の中で成長し、戦争は映像の中の世界と感じている外国人であることを強く意識させられ、奇妙な疎外感を感じてしまいました。

なぜこうもペシャワールへ戻ろうとするのかと何度も自分に問い、かっこいい答えを考えたりもしたが、それは上滑りする。ただその地と、そこにいる人達を好きになり、嫌いになり、また、好きになって自分があまり無理をしないうでその場にすることができた。それだけのようだ。その地を知ってしまったのである。

明日はペシャワールへ発つが、今回私事のため一月初めに行くはずが末になり、二月初めに延び、とうとう二月末となった。日本の社会ではどうであらうか。一月初めから出社するはずのものが末からになり……こんなことはできないし、また、許されるものでもないだろう。こういうことを私はしてしまった。私のどこかに、私はしてあげる側、現地はしてもらっている側という思い上がり、気持ちがあつたのだろう。決して現地をばかにしてはいないつもりだったが……つきつめて考えればそういうことになるのだろう。

「トーキョーを撃て!!」 ●東京報告会レポート

ペシャワール会会員(東京) 服部 亮市

中村先生の著書『ペシャワールにて(増補版)』

をお読みになられた会員の方なら、この標題は覚えておられることと思います。ただし、この場合先生がそこで述べられていることは、世界最先端の国際性を誇るトーキョーという都市とそこに集まるえせ知識集団の虚構性を鋭く見抜いている深い洞察であるわけですが、今回、私がこの題名を先生の許可なく使うこととしたのは、残念ながら先生の文明批評的見識に対抗して論理を展開しようというわけではありません。またそのようなことはできるはずありません。

それでは何故、今、「トーキョーを撃て」なのか!?

中村先生のご報告や会報、その他の種々の情報によれば、現地JAMSの活動は着実に拡大の方向に向かっていることが我々会員に伝わってきます。そしてこうした事業にまずもって必要なことは補給ルートの確保であり、これを支える会員の支持であろうと思われます。

現在、東京をはじめとする関東地方にペシャワール会員は約二百名余を数えているはずですが、これを核としてさらに会員層を拡充するよう福岡の作戦総司令部(?)から指示が出され、これを受け

た情報工作員T氏が秘かに東京に送り込まれたのは(実は単なる転勤ですが)一昨年の四月のことです。T氏はその天才的な人脈づくりの能力によりたちまちネットワークを固め第一回目の現地報告会(一九九二年夏)を開くことに成功したのでした。

その後T氏はロンドンへ旅立たれたので(これも単なる転勤ですが)、彼の指導を受けたHという夫婦ものが彼の築きあげたとノウハウに学び、十周年記念であるシャワリ先生と中村先生による現地報告会開催(東京・一九九三年八月)にこぎつけたわけです。この時は平日の夕方にもかかわらず約八十名の方々の参加を得ることができました。この時の模様は、NHKのE TV 8でシャワリ先生のインタヴュー番組の最初と最後に映像で紹介され気がつかれた会員の方も多いと思います。そして本年一月十五日には、中村先生にお願いし第三回目の現地報告会を開催できました。この時は会員の方に加え非会員の方達の参加も多く、その点で大きな成果が得られたのではないのでしょうか。報告会後の懇親会にも引き続き多くの方達が残って下さり、先生を囲んで楽しいひとときを持つことができました。特に先生の高校時代の同



東京で報告する倉松さんと中村医師

窓の方々も駆けつけて下さり、組織力とパワーは頼もしい限りでした。またそれぞれの人々がそれぞれのきっかけでこの会に参加している状況を知るにつけ、こうした縁を大切に育てていきたいと考えます。

私達は先生を始めとする現地スタッフのように汗を流す協力はできませんが、金を出さずして仲間を増やすという協力を通じて、現地の人々との共感と「ともに生きる」実感をわかちあうことができると思います。

その日二次会、三次会を経て、中村先生を宿舍にお送りする時、「東京にもおもしろい人達が揃いましたね」とおっしゃったのを聞いた時、私はまずは成功だったと胸をなでおろしました。そしてJAMSの活動が現地のニーズに応じて拡大できるために、さらに東京での普及に工夫を加えていかなければと思っています。

トーキョーを撃て! この指令がますます重みを持つようになってきたことを、楽しみながらそして真摯にとらえていきたいと考えます。

中村哲著『ダラエ・ヌールへの道』を読んで——山内昌之

一知半解の事情通にたいする痛烈な批判

——ユーモアや余裕を忘れない中村氏の姿が随所に見い出される

「アフガニスタン——それは光と影です」

一九八四年以来、アフガン難民の医療に従事する著者の指摘には、ずっしりとした重みがある。前著の『ペシャワールにて』に続く、アフガニスタンやパキスタン現地の人との交遊と診察の貴重な記録である。最新のアフガニスタン情勢の紹介にもなっている。

欧米や日本から来た論客やボランティアのなかには、アフガン人の難民キャンプ生活を見て、「イスラムの後進性」や「男による女性虐待に金切り声を上げる」者が多いという。こうした外国人の解釈や異文化論こそ、アフガン人の言動より「さらに解らない」というのが著者の感想である。これは、一知半解の事情通にたいする痛烈な批判になっている。

「日本——アフガン医療サービス」の主宰者であり、アフガン国内ダラエ・ヌールにつくった新診療所で文字通り生命を賭して診察を続ける中村氏には、とくにアフガン社会の解放とか救済といった気負いはない。むしろ、戦火の恐怖で言語も失った人びとの病を癒し、高熱と全身の痛みで耐えられなくなった患者に少しでも「人間」としての

誇りを取り戻させる。

中村医師の医療活動の信念は明快である。「べたべたと優しくするよりも、泣き叫びを放置して思い切り心の膿を出させる方がよい。事実と結果が最も雄弁である」。

しかし、こうした考えは時にスタッフに大きな忍耐力を強いる。ある外国人がやってきて、「病棟の無秩序と悲惨な女性患者の境遇」を嘆いたそうである。

しかし、中村氏は「即座にその意味が分からなかった」という。それは、「瀕死の野良犬が人間に立ち直るのを大きな希望で見てきたからである」。それでも、せっかく治療してきたこのハンセン氏病患者が気管切開をして失語状態になってしまった。極限状態を経験するのは患者だけではないのだ。

各種の会議にありがちな「無駄口と議論」への嫌悪と出席拒否も、著者ほどの体験を重ねるとまるで自然な振る舞いに思えてくる。

どんなにつらい環境にあっても、ユーモアや余裕を忘れない中村氏の姿が随所に見い出される。アフガン難民の治療にあたる日本人医師やレント



ペシャワール市街の雑踏

ゲン技師があまりといえればあまりの現地民の対応に怒りはじめると、唐の高僧・玄奘が仏典を求めてペシャワールあたりに来た時の言辞をさりげなく紹介する。「この地は人情が頗る悪い」と『大唐西域記』が記録しているというのだ。高僧でさえこの調子だから、「偉くもない我々凡人が簡単に解るものではない」。

仏教でいう「悪智」に陥らず、観念の格闘で終わらないようにしよう、という中村医師の勧めは、広くわれわれにもあてはまる素晴らしい警句ではないか。

それでも、「率直さ」だけは忘れないようにしたい、というのも著者らしい。玄奘も「悪智」こそたなかったが、率直に悪口を末代まで記している、という指摘には思わず喝采を送りたくなる。クリスマスの日、ペシャワールに出た医師は患者五〇人に「見たこともない高級の洋菓子」を土産

に買って帰る。一週間分の食事代にもなるケーキを暖かいストーブの側で食べながら、談笑する光景は感動的である。久しぶりに笑顔に戻った患者を温顔で見守る中村氏のシルエットが、ストーブの明りに照らされて浮かぶようである。
(東京大学教授・「エコノミスト」94・3・22)

中村哲著『ダラエ・ヌールへの道』を読んで

西日本新聞

「国際協力」の根源を問う

——その厳しい現実主義こそが十年の活動を支えた

福岡出身の医師である著者が、パキスタン、アフガニスタンで医療活動を始め、十年になる。ソ連の侵攻とそれに続く内乱の時代、あらゆる困難に直面しながら、その活動は驚くべき成果を上げたと言つてよいだろう。本書はその報告書だが、実は「先進国」に住むわれわれに刃を突き付ける厳しさを含んでいる。

テーマは「支援」とは何かである。ソ連軍撤退が決まった時、各国から二百もの援助団体が殺到した。しかしその後も内乱が激しさを増すとはとんだが撤退、難民たちの西欧諸国と国連への不信だけを残した。

先進国の国際的思惑、宗教団体の理想主義、無邪気な人道主義、組織の実績主義、日本人のアジアへの贖罪意識……。そんなものもろの動機による国際援助が現地に何をもたらしたか。辺境の難民の視点からの報告は衝撃的だ。

キリスト者である著者の出発点もまた、素朴なヒューマニズムだったろうと思われる。しかし、他の多くの援助活動と違うのは、現地住民にとって本当に必要なものは何かを常に自問し、複雑怪奇な状況の一つひとつに具体的に対応したことだ。事実と結果しか見ない、と著者は言う。その厳しい現実主義こそが十年の活動を支えた。

ハンセン病多発地帯の診療所建設のために、山の村を訪れる描写は美しい。神々しい山々、荒々しくも素朴な人々、十数年の戦乱のあと、緑がよみがえる農地。その美しい文章を支えるのは、近代の汚れと無縁に生きる人々への共感である。

ソ連の武力侵攻、さらに援助に乗り込んだ先進国の進歩主義、キリスト教団体の教化主義などを「近代の悪」だとする視点が、著者にはある。つまり、著者のアジア辺境での活動の背景には、近代とはなにかという巨大な問いかけがあると云つ

てよい。

(西日本新聞 93・12・26)



JAMSで投薬を受ける母子



石風社 定価2060円
*全国の書店で注文できます。
石風社に直接注文の場合は、
送料一律250円(何冊でも)
郵便振替 福岡4-25227

●事務局だより

*今号発送分から郵送料が値上がりして、一年間で三十万円近い経費増になります。未使用の切手、書き損じのハガキ等がありましたらご寄贈下さい。

*三月二十九日に、パキスタン辺境省アフガン難民担当局長のマティウラ・カーン氏が来日され、わざわざペシャワール会事務局との会見を希望されましたので、一タレセブションを持ちました。翌午前中は福岡市内を案内しながら、会の活動について更に説明いたしました。「大変良い印象を持って帰られた」との外務省担当者の話でした。

*四月三日中村先生が帰国されました。今年も講演の依頼が増えていますが、特徴の一つは大学です。すでに福岡歯科大学（15周年特別講演）、九州大学、福大医学部、久留米大学医学部が決まっています。中村先生は六月再び現地へ戻られますので、講演をお考えのグループは七、八月で予定を組んでいただければ幸いです。大学といえば、福岡にある大学の医学部新入生に医学部選択の動機を面接時に尋ねた処、入学生約六十名の内五名がペシャワール会（中村医師）の存在を知ったことを上げたそうです。嬉しいことです。これまで中村先生の話を聞いた高校

生・予備校生の数は一万人を越えています。先生の言葉がじわりと浸透していつていくようです。
*中村先生の「ヌーリスターの溪谷(1)（インダルの園2）」は誌面の都合で次号回しです。

〔◎村から〕

*事務局恒例の裏行事が、年少なくとも三回はある。四月の花見、五月の新緑ツアー、十二月のもちつき。最近やや疲れ気味で軽く弁当でも買ってと四月九日の花見となったが、結局もつ鍋に、炭火焼き魚、手作りレモン酎も登場、ああ宴会だけは手抜き出来ない性に苦笑。見せ物は火吹き男だけだったが、次回まで私も芸の一つ磨いておこう（アビ）

*◎事務局の人たちは優しい人たちです。私が水曜日に事務局に行かなくても、花見の誘いの電話をくれます。毎週出てこいという催促の電話ではありません。数か月事務局に来ていない人への会報にも、元気してきますかと書き添えます。もつと出てこいという催促ではありません。前年の会費未納者にも会報を送ります。これも催促ではありません。◎村の原稿から逃げ回っていた私にも、催促なんてないと思ったのですが…（原稿恐怖症男）

ドラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七)四 四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七)四 四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価二一〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二丁目一六
電話 〇三(五六八七) 二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一〇千円以上、特別会員一〇一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇
二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二
三七二) 内におく。